高齢者の自動車運転

「高齢者の自動車運転」に寄せて

佐伯 覚

(日老医誌 2018 ; 55 : 185)

高齢者の自動車運転の問題が社会的に大きくクローズアップされている。わが国は世界に類を見ないスピードで高齢化が進み、65歳以上の自動車運転免許保有者数が1,600万人を超え、交通死亡事故の第一当事者に占める75歳以上の高齢者運転者の割合は10年前の約2倍に達している。また、認知症の有病率から認知症者の免許保有者数は100万人とも推計されている。このような背景のもと、認知症ドライバーによる高速道路逆走や交通事故が多発している現状から、警察庁は改正道路交通法を2017年から施行し、高齢ドライバーの免許更新時の認知機能検査を義務化するなどの対策を講じている。

高齢ドライバーは、個人差はあるものの、加齢に伴う視力や視野、反射能力、運動能力などの低下により、運転操作に必要な安全運転行動や運転技能の低下を来しているが、このような身体機能の低下は徐々に進むことから自覚しにくいという特徴がある。そのため、

自分の運転能力を正しく判断できず、結果として安全運転行動がとれず事故につながっている。事故に直結するヒューマンエラーを防止できる自動運転の導入が理想であるが、自動安全ブレーキなど部分的自動運転技術の発展がみられるものの、完全自動運転車が実用化するまでの道のりは遠く、自動車運転はまだまだ自ら人間が行う必要がある。

自動車運転は基本的な生活機能の一つであり、特に足腰の弱い高齢者にとっては重要な移動手段でもある。どのような状態であれば運転継続が可能か、医療現場では高齢者の自動車運転に関する相談が急増しており判断を迫られることが多い。本特集では、高齢者の自動車運転に関して、事故の特徴、認知機能や身体機能の変化、運転能力の評価などについて解説を頂いた。本特集が多くの会員に役立ち、高齢者の自動車運転の問題の解決に役立つことを願っている。

産業医科大学リハビリテーション医学講座

連絡責任者：佐伯 覚 産業医科大学リハビリテーション医学講座〔〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘 1-1〕

e-mail: sae@med.uoeh-u.ac.jp

doi: 10.3143/geriatrics.55.185